広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	古典に見えるカッコウ（承前）
Author(s)	水谷，智洋
Citation	プロピレア , 22 : 74 - 84
Issue Date	2016-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041557
Right	Copyright (c) 2016 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	

Hiroshima University Institutional Repository

エッセイ

古典に見えるカッコウ（承前）

水谷　智洋

（8）Aristotelēs, *peri ta Zōia Historiai* (lat. *Historia Animalium*) 6.563b29-564a4（第 6 巻第 7 章）

カッコウの雛は誰も見たことがないといわれている。カッコウも卵を産むには産むが、巣を造らずに産むのであって、時には自分より小さい色々な鳥の巣の中に、その鳥の卵を食ってから、卵を産むこともあるが、特にジュズカケバトの巣の中に、やはりその卵を食ってから、産むのである。たまには二個産むが、大ていは一個である。ヒュポライスの巣にも産む。この鳥がかえして育て上げるのである。［カッコウの］一番脂がのって、肉がうまくなるのはこの時期である 5)。

アリストテレース（前 384-322）の『動物誌』の中で、カッコウの託卵について述べた一節です。文中、ジュズカケバト、ヒュポライスの原語はそれぞれ φάψ, ὑπολαΐς です。*L-S-J* は前者を‘wild pigeon’、後者を‘an unknown small bird’としていますが、wild pigeon がジュズカケバトでよいのかは、私のよく判断するところではありません。またヒュポライスについては、Theophrastos（前 371 頃-287 頃）、*peri Phytōn Aitiōn* (Lat. *de Causis Plantarum*)『植物原因論』2.17.9 に、カッコウがこの鳥に託卵することにチラッと言及した一文がありますが、B. Einarson & G. K. K. Link の英訳本（The Loeb Classical Library, 1976）p.347 はこれを‘wheatear’としています。研究社『新英和大辞典』（第 6 版、2002）によれば、wheatear は「ハシグロヒタキ」なる「サバクヒタキの類の小鳥」の由ですが、これまた私

にはその当否を云々することができません。

最後の一文、「脂がのって、肉がうまくなる…」の原文は、γίγνεται δὲ πίων καὶ ἡδύκρεως κατὰ τοῦτον τὸν καιρὸν μάλιστα です。ここで小うるさいことをいうなら、文末の μάλιστα は直前の 4 語を強調しているのですから、「わけてもこの時期に」「脂がのって、肉がうまくなる」となりましょう。「この時期」とは、むろん、カッコウの雛が仮り親に育て上げられて巣立つ頃です。ちなみに、Plinius Major (23-79), *Naturalis Historia*『博物誌』10.27 でも、nulla tunc avium suavitate carnis comparatur illi (= cuculo)「どんな鳥でも、肉の美味しさでは、この時期（一人前に育ち上がった頃）のカッコウに比ぶべくもない」とあります。ついでながら、島崎氏は A. Karsch の独訳（Stuttgart, 1855; rep. Berlin, 1911）にあった注を引いて、「近代ギリシアでも、アテネだけで 1 年に千羽位市場に出る」（391 頁）と記しておられますが、この間の事情は、たぶん、今も変わりはないと思われます。一度でもアテネ市内のあの市場をのぞいたことのある人なら、さもありなん、と首肯されるでしょう。その鳥肉売り場では、古人の味覚を受け継いで、「サアサア、脂ののった旬のカッコウだよ」とお客に売り込んでいるのでしょうか。

アリストテレースにはもう一箇所、カッコウの託卵についてやや詳しく叙述した一節があります。

（9）Aristotelēs, *peri ta Zōia Historiai* 9.618a 8-30（第 9 巻第 29 章）

カッコウは、先に述べたように、巣を造らず、他の鳥の巣、ことにジュズカケバトの巣や、地上ではヒュポライスとヒバリの巣、樹上ではいわゆる「キミドリ」［カワラヒワ］の巣の中に産卵する。ところで、卵は一個産み、自分では抱卵せず、産卵された巣の鳥がかえして育てるのであって、その鳥はカッコウの雛が大きくなると、自分の雛を巣の外へ落として殺してしまうそうである。また或る人々は、親鳥が自分の雛を殺して食べさせる、とさえいっている。カッコウの雛は美しいので、自分の雛が気に入らないからだ、という。ところで、現状を目撃した人々は上述の話の大部分を一致して認めるが、親鳥が自分の雛を殺す、という点は一致せず、或る人々は、［産みの親の］カッコウが自分でたびたびやってきて育ての親の鳥の雛を食べるのだといい、また或る人々は、カッコウの雛は体がはるかに大きいために当てがわれた餌を真先に食べてしまうので、他の雛を餓死させるのだといい、また或る人々は、カッコウの雛は一緒に育てられていても他の雛よりはるかに強い

ので、殺してしまうのだといっている。カッコウは子の作り方では思慮深く見える。というのは、自分の臆病なことと、［万一のことがあっても］雛を助けてやることが出来そうもないことをよく心得ているので、自分の雛をちょうど換え子のようにして［他の鳥の巣に産み］、その生命を全うさせるのである。実際、この鳥は臆病ということにかけては他の鳥に引けを取らぬからで、小さい鳥に羽をむしられて、逃げるのである 6)。

文中、ヒバリ、カワラヒワの原語はそれぞれ κόρυδος, χλωρίς です。このうち χλωρίς は、形容詞 χλωρός 'greenish-yellow, pale-green' (*L-S-J*) に由来しましょうから、島崎氏は原文の τῆς χλωρίδος καλουμένης を「いわゆるキミドリ」「カワラヒワ」と邦訳されたのでありましょう。なお、同氏は χλωρός に「萌黄色の」という邦語をあてておられます（145 頁）。

ここにはいろいろな説が紹介されています。その多くは眉唾物らしく思われますが、真偽の詮索はとうてい私の力の及ぶところではありませんから、皆様には先に引いた『大百科事典』の樋口広芳氏の記事の後半をお読みいただいて、真相を判断していただきましょう。

（カッコウは）自分では巣をつくって繁殖せず、ほかの種の鳥の巣に自分の卵を産みつける。托卵相手はこの類では比較的幅広く、日本では二十数種が知られているが、おもにモズ、オオヨシキリ、ホオジロである。…雌は托卵相手の鳥の巣にいき、その巣の中から卵を一つくわえとり、自分の卵を一つ産みこむ。くわえた卵は食べてしまうか、もち去る。この托卵に要する時間はほんの数秒間である。この間、托卵される側の鳥はけたたましく鳴いて脅したり、実際にカッコウに体当たりして追い払おうとしたりする。托卵される巣は産卵中のものである場合が多く、抱卵が開始された巣に托卵することは少ない。一つの巣には、ふつう 1 個しか托卵されない。卵は仮親のものよりひとまわり大きく、色や斑はしばしば非常によく似ている。雛は 10 日前後で孵化する。このときは仮親の卵はまだ孵化していないことが多く、カッコウの雌は、これらの卵を一つずつ背中にのせて巣外にほうり出してしまう。こうして巣内を独占し、その後の仮親の世話を自分だけに向けてしまう。雛は巣立ち後もかなり長い期間にわたって仮親の世話を受ける。

次に引くアリストテレースの文章は、実をいえば、（8）の直前にあったもの

ですが、いささか突飛な（と私には感じられる）話なので、あえて別扱いにいたしました。

（10）Aristotelēs, *peri ta Zōia Historiai* 6.563b14-28（第 6 巻第 7 章）

「カッコウはタカの変わったものだ」という人々もいるが、この［カッコウの現われる］頃それに似たタカが姿を消すからで、カッコウが鳴き出すや否や、二、三日の遅れはあるが、他のタカもほとんど見られなくなるのである。カッコウは夏のしばらくの間現われるが、冬は姿を見せない。タカは曲爪であるが、カッコウは曲爪ではない。さらにカッコウの頭部はタカに似ず、以上の二点ではむしろハトに近い。しかし色だけはタカに似ていて、ただタカの斑色は線のようであるが、カッコウのは点のようである。たしかに体の大きさと飛び方はタカの中で、通例カッコウの現われる時期に姿の見えなくなる、一番小さいものに近い[7)]。

カッコウが姿を見せる頃、タカ ἱέραξ が姿を消す。だからカッコウはタカが変身したものだ ὁ κόκκυξ ... μεταβάλλει ἐξ ἱέρακος という俗説に対して、アリストテレースは 3 点を挙げて反駁しています。タカは曲爪 γαμψώνυχος だが、カッコウはそうではない。カッコウの頭部 τὰ περὶ τὴν κεφαλήν はタカに似ていない。タカの斑色は線のようだ τὰ ποικίλα οἷον γραμμαί εἰσι、だがカッコウのは点のようだ οἷον στιγμαί. 論駁として充分でありましょう。

ところが、前に一度名前を出したテオプラストスはアリストテレースの高弟で、学園リュケイオンの学頭を継いだ高名な哲学者にして植物学の祖とも仰がれる人物ですが、その彼が、*peri Phytōn Historia* (lat. *Historia Plantarum*)『植物誌』2.4.4 でこんな一文をつづっています。「若干の動物は季節によって変身するように思われる、たとえば、タカ、ヤツガシラ ἔποψ、その他の似かよった鳥のように。」ここでは、タカが変身してカッコウになるとまでは明言していませんが、テオプラストスは、どうやら、師が否定した俗説に与しているかのようです。

この俗説は、それから 3 世紀程後のプリーニウス『博物誌』10.25 の coccyx videtur ex accipitre fieri tempore anni figuram mutans「カッコウは 1 年のある時期にタカから変身して現れるように見うけられる」に受け継がれています。俗説というものは、ギリシアでもローマでも、しぶとく生き続けていたのでしょう。なお、プリーニウス『博物誌』10.25-7 は、カッコウについて詳述した箇所では

ありますが、その内容は先行するもろもろの著作の受け売りばかりで新味はありませんから、本稿では番号を付して取り上げることはいたしません。

次はローマ喜劇に出る「カッコウ」です。

（11）-a　Plautus, *Asinaria* 934

ART.　Cano capite te cuculum uxor ex lustris rapit.

アルテモーナ　白髪頭のカッコウ鳥（どり）のお前さんを、女房が淫売宿からかっさらうのさ。

プラウトゥス（前 250 頃-184）には 20 篇の喜劇作品が残っていますが、そのうちの『ロバ物語』（前 212 年 (?) 上演）の 1 行です。情況は説明を要しません。悪所の女にうつつを抜かしているアテーナイの年寄りを、女房が「カッコウ」呼ばわりしているのです。

（11）-b　Plautus, *Trinummus* 244-5

LYS.　“da mihi hoc, mel meum, si me amas, si audes.”
ibi ille cuculus: “ocelle mi fiat:

リューシテレース　「あたしにこれを頂戴な、ねえハニー、
あたしを愛しているなら、お願いよ。」
するとそのカッコウが「ぼくのお目々ちゃん、あげるとも…」

『三文銭』（前 194 年以降上演）中の 1 コマ、アテーナイの若者がひとりで声色を使っています。遊女が男に金目のものをねだると、骨抜きにされた男が他愛なくプレゼントしてしまう、という設定です。

（11）-c　Plautus, *Pseudolus*　96

PS.　Quid fles, cucule? vives.
CAL.　Quid ego ni fleam,

プセウドルス　なぜ泣くんです、カッコウさん。死ぬことはないですよ。
カリドルス　これが泣かずにいられようか。

『プセウドルス』(前 191 年上演）中の 1 行。ある遊女にぞっこん惚れ込んだものの、ふところに一文の金もなし、このままではすでに手付けを打ったライバルに女が連れて行かれる、もう俺は首をくくる、と嘆き悲しむ主人を、その奴隷のプセウドルス（「嘘つき」の意）がなだめすかします。プラウトゥスに出る以上 3 箇所の cuculus は、たしかに *Oxford Latin Dictionary, s.v.* cuculus が ‘2 (as a term of reproach) A fool, ninny, ‘cuckoo’.’と定義しているとおりの語義で用いられています。けれども最後のプセウドルスの場合は、まさか奴隷が主人に面と向かって「間抜け」呼ばわりはできないでしょうから、「おバカさん」ぐらいのところでしょうか。

ところで、プセウドルスの Quid fles, cucule? を鈴木一郎氏は「なぜ泣くんです、鳥みてえに！」と訳し、「郭公。ク、ク、クと泣いたので」と注をつけておられます（『古代ローマ喜劇全集　第 4 巻』、東京大学出版会、1978、16-7 頁）。一文なしの若者は、実際はどのように泣いたのでしょうか。次の（12）が参考になるかもしれません。

（12）Varro, *de Lingua Latina* 5.75

de his pleraeque (volucres) ab suis vocibus (dictae sunt) ut haec: upupa, cuculus, corvus, hirundo, ulula, bubo;
これらの（鳥の）うち、大多数は（その名称が）鳴き声からきている。たとえば、ヤツガシラ、カッコウ、カラス、ツバメ、モリフクロウ、フクロウ。

前 1 世紀の大学者ウァッロー（前 116-27）の『ラテン語論』の一文です。ここに挙げられた 6 種の鳥のなかには、その名称と鳴き声の関係がピンと来ないものもありますが、カッコウとフクロウだけは素直に納得できます。ですから、（11）-c のカリドルスの泣き声は、まさか、「ウェーン、ウェーン」でも「アーン、アーン」でもありますまいから、プセウドルスの耳には「クク—」と、まるでカッコウの鳴き声のように聞こえた、そこで思わず cucule と呼びかけた、と理解しておいたらいかがなものでしょうか。

（13）Horatius, *Sermones* 1.7.28-31

tum Praenestinus salso multoque fluenti
expressa arbusto regerit convicia, durus
vindemiator et invictus, cum saepe viator
cessisset magna compellans voce cuculum.

そこでプラエネステの男は、（相手方の）機知の洪水に応じて、
ブドウ園から絞りとったエキスのような毒舌を浴びせ返した、したたかで
負け知らずの園丁さながらに。そんなときには通りがかりの旅人が
大声で「カッコー」と呼びかけても、しばしば自らの負けを認めざるを得なかったものだ。

ローマ抒情詩の第一人者ホラーティウス（前 65-8）の『風刺詩』の一節です。ここで、なぜ旅人がブドウ園の園丁に「カッコー」と呼びかけるのかは、次の（14）が説明してくれるようです。

（14）Plinius, *Naturalis Historia* 18.249

この時期（＝晩春）に農夫は、最初の 15 日を使って春分前に終わらせられなかった作業に精を出さねばならない。さもないと、per imitationem cantus alitis temporiae quam cuculum vocant カッコウと呼ばれる季節鳥の鳴き声を真似て、ブドウの剪定している者どもが忌まわしい非難を受けることになるのを知っているからである。というのも、剪定刀がブドウの木に使われているのをその鳥に見られるのは、園丁の名折れであり、面目にかかわると見なされているので。

（1）ヘーシオドス『農事と暦』では、カッコウの初鳴きがボイオーティアーの農民に種まきを促していました。また、（5）アリストパネース『アカルナイの人々』では、アッティカの血の気の多い若者たちでさえ、カッコウの鳴き声で野良仕事に駆り立てられていました。一方、ローマの田舎では、カッコウの飛来前にブドウの木の剪定を終えているのが望ましいとされていたかのようです。そこで（13）では、もうカッコウは鳴いているのに、まだブドウの木と取り組んでいる園丁を見かけて旅人が、恰好のからかいの的を見つけたとばかりに、「カッコー」と声をかけたところ、あにはからんや、おそろしく口達者な園丁に逆にやり込められてしまった、という情景が語られているのでありましょ

う。

ギリシア･ローマ古典中のカッコウの記事としては、あと Klaudios Ailianos（170頃-235）の *peri Zōiōn Idiotētos* (lat. *de Natura Animalium*)『動物の特性について』3.30 があります。しかしこれは、プリーニウス『博物誌』の記事と同様、他書からの引き写しばかりのようで、真面目な考察に値しません。一体、「（仮り親の巣で孵化したカッコウの雛の）羽毛が生えそろうと、雛は自分が本当の子でないことがバレて虐待される」ので、「その巣を離れて本当の親のところへ行く」などという荒唐無稽な臆説を、筆者はどこまで信じていたのでしょうか。

最後に『ギリシア詩華集』より一首。ΑΔΗΛΟΝ「読み人知らず」とありますから、作者もいつ頃の作かも不明です。

（15）*Anthologia*　9.380　ΑΔΗΛΟΝ

Εἰ κύκνῳ δύναται κορύδος παραπλήσιον ᾄδειν,
　τολμῷεν δ’ ἐρίσαι σκῶπες ἀηδονίσιν,
εἰ κόκκυξ τέττιγος ἐρεῖ λιγυρώτερος εἶναι,
　ἶσα ποιεῖν καὶ ἐγὼ Παλλαίῳ δύναμαι.
もしもヒバリが白鳥みたいに鳴けるなら、
　フクロウがあえてサヨナキドリと競おうとするなら、
もしカッコウが蝉より心地よい声だと言い張るなら、
　わたしだって、パルラディオス並みのことができるというもの。

ここではカッコウと蝉が比べられていますが、ギリシアの蝉は、わが国のシャーシャー、ジージーなどというううるさい種類と異なり、ただただ、ジィジィとごくひかえめに鳴く虫であった（現在から推して古代も、と想像します）ことを念頭におく必要がありましょう。そのうえで、どちらの声が λιγυρώτερος かは読者のご判断次第です。

これでカッコウの稿はおしまい、といきたいところですが、一つ気がかりが残っています。それは、前号のはじめに出した金田一春彦『ことばの歳時記』6月 3 日の条が、「うき我をさびしがらせよかんこ鳥」という芭蕉の句を引くことに始まり、つづいて「入りの悪い野球場や劇場をさして『閑古鳥が鳴くような状態』とたとえる。カンコ鳥の鳴き声がたまらなく寂しいものと聞いたところ

から生まれた表現である。カンコ鳥は今のカッコウであるが…」とつづられていることです。ここで私は自らの無知ぶりを告白しなければならないのですが、カンコ鳥がカッコウの異名とはまったく知りませんでした。それに、カッコウの鳴き声を「たまらなく寂しいものと聞いた」覚えもなさそうです[8]。むろん、気が滅入っているときなどに、人気（ひとけ）のない林でその鳴き声を耳にするようなことがあれば、私とて多少は「さびしが」るかもしれませんが、たいていなら、なつかしさを覚えつつ、ドキドキするような幸福感につつまれるような気がします。しかし、これには個人差がありましょうから、あの鳴き声を聞いてさみしくなる人がいても、一向にかまいません。実際、そういう感受性の鋭い人がかつていた、そして今もいるかもしれません。そこで私の「気がかり」です。一体、古代人はどうだったのでしょうか。

　カッコウは春告げ鳥でした。人々はその鳴き声を聞いてなんらかの農作業に精を出したようです。やがて飛来する数が多くなると、鳴き声はときに喧騒そのものであったかもしれません。また、托卵行動のせいか、卑怯者呼ばわりされることもあり、ときには愚か者の代名詞ともなりました。そしてその肉は世人の愛好するところであったようです。これらを概観しますと、古代人は、総じて、カッコウの鳴くのを聞いてさびしがるとか、物思いに沈むというような心情とは無縁であったように思われます。この点、日本人（の一部？）のそれとの相違は何に由来するのでしょうか。彼の即物的に対して、我はあまりに感傷的なのでしょうか。一言にしていえば、mentality の相違かも、と、差し当たっては、お茶を濁しておきます。

［追記］私は前号で、1997 年以降も小金井でカッコウの鳴き声が聞かれたかを当地の自然観察グループにたずねてみたい、と記しましたが、今年に入って「はけの森調査隊」のリーダー大橋田鶴子氏から、「小金井自然観察会」の存在を教えられました。早速、書面で問い合わせてみますと、会長の大石征夫（ゆきお）氏から「小金井市内のカッコウの観察記録　―1997 年～2015 年―」という詳細なレポートが送られて来ました。それによれば、1997 年～98 年、2000 年、2003 年、2011 年は「記載なし」でしたが、それ以外の年には鳴き声を聞いたとの報告が数回はあり、2014 年にはなんと 15 回もの報告が会員諸氏から寄せられていました。翌 2015 年は 4 回にダウンしていますが、これにより「小金井近郊」は、いぜん、カッコウの飛来地（かつ繁殖地？）でありつづけていることが確かめられまし

た。また最近では、大橋氏から本年 6 月 12 日に JR 中央線南側の公園でひとしきりカッコウが鳴いていた、とのうれしいお便りもいただきました。この場を借りて、大石、大橋両氏に厚く御礼を申しあげます。(「はけの森」とは国分寺崖線南の急な下り坂一帯の森をいいます。)

注

5) アリストテレースの訳文は島崎三郎氏のものです。『アリストテレス全集　7　動物誌』(岩波書店、1968)、189 頁より引用しています。

6) 訳文は同じく島崎三郎氏のもの。『アリストテレス全集　8　動物誌　動物部分論』(1969)、80-1 頁より引用。

7) 『アリストテレス全集　7　動物誌』、188 頁。なお、「カッコウはタカの変わったものだ」について、島崎氏は D'Archy Thompson の次のような説を紹介しておられます(390 頁、注(2))。「ここの伝説は両鳥が外見上似ているばかりでなく、カッコウ κόκκυξ とヤツガシラ κούκουφα (ἔποψ) の鳴き声が似ていて、ヤツガシラは神話ではタカの一種チュウヒ κίρκος の変わったものだといわれている点を混同したために起こったもの」。これは『動物誌』の Thompson 訳(Oxford, 1910)に付された注と思われますが、私はその説の当否を云々することができません。

　また、A. L. Peck (tr.), Aristotle, *Historia Animalium, II* (The Loeb Classical Library, 1970), p. 249 に 'The trasnformation of the cuckoo into a hawk was discussed by Goethe and Eckermann (*Gespräch vom 8. Okt .1827*) という注がありました。早速 、市の図書館でエッカーマン著・山下肇訳『ゲーテとの対話(下)』(岩波文庫、1969 年)を借り出して該当箇所を開いてみますと、ゲーテの、昔は博物学の研究が遅れていたから、(件の鳥は)冬になると猛禽になるとの考えが広まっていたとの発言に対して、エッカーマンが、そういう見方は今でも民間に残っている、と応じています。そしてこの鳥の生態についての対話がしばらくつづくのですが、ここで奇妙なのは、「カッコウ」とあってほしいところがすべて「ほととぎす」となっていることです。私はこの点をかねてより全幅の信頼を寄せている Germanist の平井敏雄氏に問い合わせてみました。すると氏は、原文にある 30 回以上の Kuckuck が例外なく「ほととぎす」になっていることを確認されたうえで、たぶん、これは日本の読者への配慮から出たことではないだろうか、というお考えを寄せて下さいました。私も山下先生が誤訳されたとは毛頭考えませんが、Kuckuck はやはり「カッ

コウ」であってほしかった、と残念に思います。なおまた、H. Rackham (tr.), Pliny, *Natural History, III* (The Loeb Classical Library, 1940), p.308 に‘This belief is held at the present time in some parts of Britain.’との注があります。こちらのほうは何も調べておりません。

8) ちなみに、鳩時計（実は「カッコウ時計」）が定時に聞かせてくれるあの鳴き声をさみしく聞く人はいるのでしょうか。ご参考までに、あの時計の発祥の地はドイツの Schwarzwald 地方だそうで、かの地では Kuckucksuhr、英語では cuckoo clock, …、世界中どこでも「カッコウ時計」と呼ばれているのに、日本だけは「鳩時計」ということなどを、朝日新聞 2016 年 4 月 9 日（土）be 3 頁の記事で教わりました。